

## ヨーガ行者による過去や未来の認識について

護 山 真 也

ブッダならびにヨーガ行者がいかにして過去や未来の事象を認識し得るのかということは、仏教認識論における重要な論題の一つである。周知のように、この問題の発端は、過去や未来を見通すブッダの超越的な認識をめぐる伝の記述にあるが、仏教認識論の文脈では、『俱舍論』第二章におけるヴァスバンドゥの分析 (AKBh 99.1–10) が後代にまで影響を及ぼしたと見るべきであろう。その要点は、次のようにまとめられる (Cf. 櫻部 1969: 394f.; 川崎 1991: 86f.)。

第1説: ブッダは過去や現在における衆生の業と果報とのつながりを知り、法と法との因果関係を知ること、推理 (anumāna) を通して、未来の事象を目の当たりに知ることができる。ただし、両漢訳が示す通り、これは単なる推理知ではなく、願智 (prañidhijñāna) —ブッダと聖者に共通する認識であり、ある対象を知りたいという願いから精神集中 (第四静慮) に入り、その対象をありのままに知ること—to分類される。

第2説: ブッダは衆生の心相続にある特殊な心不相応行を見るだけで、精神集中や神通力を働かせることなく、未来に起きることを予見できる。

第3説: ブッダは知ろうと望むだけで (icchāmatreṇa), 一切を知ることができる。ブッダは占い師のような存在ではなく、諸法を直観する者 (sākṣātkārin) である。

このうち、第1説と第2説はいずれも何らかの手がかりを通して未来を間接的に知る形式になっているのに対して、経量部に帰せられる第3説はブッダの認識の直接性を強調する。第2説は、ブッダが鋭い観察眼で衆生の内にある兆しを見てとり、その未来を予見するというものだが、後代の仏教認識論への影響は確認できない。一方、第1説と第3説は後代に影響を与えた見解である。前者は推理に基づく認識を説くが、後者はあくまでも直観 (sākṣātkarāṇa) に重きを置く。

両説の影響は、8世紀に活躍した中観派のシャーントラクシタ・カマラシーラ師弟による『真実綱要／細注』に確認できる。同書「三時の考察」章 (TS 1852–

1855) および「超感覚的対象の知者の考察」章 (TS 3473-3474) では、異なる観点からヨーガ行者による過去や未来の事物の認識が検討されるが、その相違は『俱舍論』の第1説と第3説の相違と無縁ではない。最初に、TS 1852-1855を要約したカマラシーラの記述から見ておく (Cf. 川崎 1992: 254-255, 秋本 2016: 5章, 志賀 2016)。

TSP 1090.6-11: 実に、一切の諸事物は、直接的あるいは間接的に原因・結果となる。ここで、他ならぬ現在のものは、直接的あるいは間接的に過去のものから結果であり、未来のものから原因である。知覚により、如実に〔諸事物の〕全ての形象を直接経験するヨーガ行者たちは、それ (知覚) の後に得られる清浄世間智 (*tatpr̥ṣṭhalabdhāḥ śuddhalaṅkārah*)、〔すなわち、〕究極的には対象を欠いていながらも、実在との結び付きにより整合性をもつ概念知 (*vikalpa*) により、過去や未来の事物の連なりを認識対象として、過去や未来の実在を確定する。

この見解によれば、ヨーガ行者は、一切の事物に一貫する因果関係を前提として、今、目の前にある現在の事物のなかにその原因・結果であるところの過去・未来のもの全てを理解する。このヨーガ行者の認識は、概念知の一種である後得清浄世間智に分類される。『俱舍論』ではその術語は使われていないが、諸事物の因果関係に基づいて、過去や未来のものから認識を説明づけている点で、ここに『俱舍論』の第1説からの影響を認めることができる。

一方、TS 3473-3474は、経量部の見解を反映したものである。カマラシーラによれば、先に見た TS 1852-1855の説明は、ブッダが「〔過去・未来の事象をふくむ〕すべてを直観する者であること」 (*sarvatra sākṣāddarśitva*) を認める経量部の見解に反する。経量部の見解に合致する説明は、TS 3473-3474で示される。以下は、そのカマラシーラによる解説である。

TSP 1090.20-24: 実に、ちょうど真実夢 (*satyasvapna*) を見る者の認識は、究極的には対象を欠いているにもかかわらず、証因 (*liṅga*) や伝承 (*āgama*) に依拠することなく、特殊な拠り所から生じ、整合性をもつように、ヨーガ行者たちにも、ヨーガの力により、ある過去の実在がそうあったように、ある未来の実在がそうあるであろうように、〔過去や未来のそれぞれの対象についての〕鮮明な顕現をもつ〔認識〕が、証因にも伝承にも依拠することなく、生まれてくる。そして、それは知覚という認識手段 (*pramāṇa*) なのである。

この記述では、ヨーガ行者の認識が正しい認識手段としての知覚であることが強調されている。すなわち、ヨーガ行者の認識には、ヨーガの実践により、過去や未来の対象がその通りに鮮明に顕現する。ここで顕現しているものがヨーガ行者の知覚の対象となる独自相であり、その顕現の明瞭さが、その認識の非概念性

を示す。この議論の背景には、『俱舍論』の第3説とも共通する経量部の有形象認識論があるが、シャーンタラクシタ・カマラシーラはそこにダルマキールティによる正しい認識手段の定義や知覚の定義をめぐる議論をも新たに織り込んでいる。

シャーンタラクシタ・カマラシーラの議論が『俱舍論』第1説と第3説を個別に展開した内容であるのに対して、同時代の学匠プラジュニャーカラグプタは両説を接合し、因果関係に基づく推理知から直観へと高まる認識として、ブッダならびにヨーガ行者の認識を描き出した。その中心となる議論（PVABh 111.6–115.12）の要点は、次の通りである（Cf. 岩田1986, 1987, Franco 2011, Moriyama 2014: 68–74）。

- 一切の事物の因果関係を抜きにして、一切を知ることはできない。様々な種類の因果の結びつきを知ることを通して、ブッダは全知者となる。
- その認識は「全ての形象の推理」（sarvākārānumāna）と呼ばれるが、直観（sākṣātkaraṇa）を本質とする点で、知覚と無区別なものとも位置づけられる。この認識の働きにより、ブッダは、推論で知られる通りに、事物を直観する。
- 直観こそが事物の存在性を規定するものであり、過去や未来のものと言われるものは、〈直観されたもの〉〈直観されるであろうもの〉の別名である。
- ヨーガ行者は、他者からは現に見えない過去や未来のものを見る。それらは、ヨーガ行者自身には目のあたりにある現在のものであるが、他者の観点からすれば（anyāpekṣayā）目に見えぬ過去や未来のものである。このように、時間は認識者毎に相対的なものであり、客観的な対象の時間は認められない。ヨーガ行者が瞑想しているときには、その対象は現在のものでしかないが、その状態から出たときには、彼は、他者の観点に合わせて、それを過去や未来のものとして語る。
- 例えば、ヨーガ行者は、ある人にやがて息子が生まれることを直観する。だが、父親になるはずの当人には、今、その息子は見えない。後者の視点からすれば、ヨーガ行者の認識は錯誤知（bhrānta）に思われるかもしれない。しかし、その時点で、ヨーガ行者の認識を錯誤知と断じることはいできない。仮に、来るべき時にも息子が生まれないことがあれば、そのときはじめて、その認識が間違っていたことが判明するだろうが、それ以前には、そのような否定は不可能である。
- ヨーガ行者には、過去や未来のものについて、それを推理で理解する通りに、その通りに把握する知覚が生じる。過去や未来の対象に対する推理を何度も繰り返し、究極まで反復すること（atyantābhyāsa）で、ちょうど煙を見て瞬時に火を理解するように、瞬時に全てを捉えることができるようになる。その素早さのために、この推理知は知覚に等しいものと見なされる。
- 自らの心相続にある諸事象を判然と知ることができれば、それに因果的に結びついた諸事物も同様に知ることができる。他者の心相続とそれにつながる諸事物についても同様に知ることができる。こうして因果の連鎖をたどることで、無限の实在を捉える全知が可能になる。

『俱舍論』第1説がそうであったように、プラジュニャーカラグプタはブッダによる過去や未来のものの認識は、基本的には、因果関係に基づく推論の積み重ねから生まれると考える。そして、因果関係で結びつくあらゆる事物について、その全ての形象の推理が成就すれば、それは第3説が言うところの直観としての全知も成就する。このように両説を接合することで、推理を前提とするヨーガ行者の直観の構造が明らかになる。だが、ここにはプラジュニャーカラグプタの独創的な理解も含まれている。とりわけ、時間を構成的なものとして捉え、ヨーガ行者が精神集中の状態のなかで対象を注視するときの時間と、他者が過去や未来として通念的に理解するところの時間には隔たりがあることを示した点は重要である。ヨーガ行者には「今、見えているもの」でありながら、他者には「見えない、過去あるいは未来のもの」がある。ヨーガ行者は、推理の働きを通して、そのような他者の視点を自らのうちに取り込み、その対象を「過去」あるいは「未来」のものとして語る。プラジュニャーカラグプタの考えでは、この推理一究極的には「全ての形象の推理」と呼ばれるもの—こそが、ヨーガ行者による過去や未来のものの認識を可能にするものである。

最後に、ジュニャーナシュリーミトラの『ヨーガ行者の確定論』の議論を検討する。彼は、(1) ヨーガ行者の直観に過去や未来のものの本性が顕現するならば、それは現在のものになり、もはや過去や未来のものではなくなるのではないか、(2) 過去や未来のものの本性はその認識とは隔絶したところにあり、その認識はその形象を有するのみだとすれば、それは認識対象(所縁)をもたないことになるのではないか、という疑問を挙げ、応答する。

YN 331.17–332.4 (Cf. SS 22.6–14, Bühnemann 1980: 63f.): それも違う。[A] と言うのも、対象が近接していなくても、瞑想 (bhāvanā) の力に基づいて [その認識が生じるのであれば]、その [対象の] 時間と場所を模倣する認識 (taddeśakālānukāri jñānam) がどうして認識対象をもたないであろうか。[その認識は認識対象をもつ。] 一方、顕現の仕方の相違により、[各人に] 時間の区別の概念知 (kālabhedavikalpa) が生じるのだから、[ヨーガ行者が語る通りに] それ (対象) に相応した実践を行うならば、それが得られることは確実だからである。[プラジュニャーカラグプタの] 『パーシュヤ』で説かれた通りである—《彼 (未来に生まれるはずの息子) は秋などの時と結びつくものとして [ヨーガ行者により] 知覚されるが、[それを見ることのできない別の者の視点から] 彼がそうであること (秋などに生まれること) が否定されることはない。》(PVABh 113.29 v. 615ab)

[B] あるいは、まさに集合として (=他の人々とともに)、時間の区別をもつ実在を理解するために、[ヨーガ行者は] 精神集中から出るときに、[本来は無区別なものの上に]

時間の区別を実体視する (kālabhedādhyavasāya). [シャーンタラクシタが次のように] 語った通りである—《実に、彼（ヨーガ行者）が知ろうと欲するものは何であれ、[彼は必ず知る]》(TS 3627ab) 云々と。一方、[ブッダの場合には] 順次に、心を傾けることなく、[すべてを] 認識するのだが、[そのことは先の記述と] 齟齬をきたすことはない。

〔C〕また、真実には、単なる認識〔それ自体〕が顕現しているからという理由で、〔過去や未来のもの〕現在のものになるという過失は付随しない。無形象論の場合に、実在の本性だけが顕現するから〔その本性の通りの時間になるというの〕とは異なる。また仮に、現在のものに対しても〔それに対する〕認識の形象 (jñānākāra) のみが顕現するのであれば、その場合、〔ヨーガ行者は〕それ（認識の形象）を「現在のもの」として実体視しているのである。遠近などの〔空間的な〕区別についても、同様に知られるべきである。それ（対象）が実体視された通りに獲得されるのであれば、確実に整合性があるのだから、〔その認識は〕正しい認識手段である。ただし〔いくら鮮明な顕現をもつ認識であっても〕、夢の中に現れる恋人のように、〔整合性をもたない〕他の場合は、別である。

まず〔A〕では、ダルマキールティが概念知における過去や未来のものの顕現を論じる際に使用した「模倣する」(anu-√kr) という語を用いて (Cf. PVSV 54.10–14), 瞑想の力で生じる認識には、過去や未来のものそのものではなくても、それに相当するものが現れること、そして、それを今、見ることでできない一般の人々にとっても、それは行為の対象となり得るのであるから、非存在であっても、認識対象（所縁）とみなして差し支えないと論じられる。PVABh の詩節の引用からも明らかなように、〔A〕の議論は、時間はそれぞれの主体に相対的に構成されたものであることを説くブラジュニャーカラグプタの議論に準拠する。一方、〔B〕は、シャーンタラクシタの TS 1852–1855 を部分的に踏襲する。ヨーガ行者が後得清浄世間智の働きで、過去や未来のものを概念的に捉えると述べられたことが、ここでは、実体視 (adhyavasāya) という術語で説明づけられている。このように〔A〕と〔B〕では、ヨーガ行者による過去や未来のものの認識は、瞑想における対象模倣の力、あるいは瞑想後の実体視の力により、認識対象（所縁）を有することが論じられ、(2) に対する応答がなされた。

残された (1) の問題については、〔C〕が回答となる。この議論は TS 3473–3474 を下敷きとしているが、そこでは不明なまま残された「では、鮮明な顕現として現れるヨーガ行者の認識のなかで、「過去」「現在」「未来」という時間の分節化はいかにして可能なのか」という疑問への答えが新たに付加されている。ジュニャーナシュリーミトラは、ここで、ヨーガ行者の認識における対象の顕現は認識それ自体と不可分であり、それ以上の分節化が不可能であること（ヨーガ行者の

直観の無時間性)を前提としながら、実体視の働きにより、それが「過去」「現在」「未来」として区別されると言う。実体視はダルマキールティの認識論における重要術語であり、シャーントラクシタやプラジュニャーカラグプタにも周知の概念であるが、それをヨーガ行者による時間認識の説明に援用した点は、ジュニャーナシュリーミトラに帰せられるべき功績である。そして、この段階で、『俱舍論』の伝統からの影響は議論の表面から消えていったのである。

〈使用テキストと略号〉

- AKBh P. Pradhan, ed. *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*. Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1967.
- TS/TSP S. D. Shastri, ed. *Tattvasaṃgraha of Ācārya Shāntarakṣita, With the Commentary 'Pañjika' of Shri Kamalaśīla*. Vol. 2. Varanasi: Bauddha Bharati, 1982.
- PVABh R. Sāṅkṛtyāyana, ed. *Pramāṇavārttikabhāṣyam or Vārttikālaṅkāraḥ of Prajñākaragupta*. Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1953.
- PVSV R. Gnoli, ed. *The Pramāṇavārttikam of Dharmakīrti: The First Chapter with the Autocommentary*. Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1960.
- YN Yoginirṇayaprakaraṇa (Jñānaśrīmitra). A. Thakur, ed. *Jñānaśrīmitranibandhāvali*. Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1987: 323–343.
- SS Sarvajñasiddhi (Ratnakīrti). A. Thakur, ed. *Ratnakīrti-Nibandhāvaliḥ*. 2nd revised edition. Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1975: 1–31.

〈参考文献〉

- 秋本勝 2016 『仏教実在論の研究——三世実有説論争——(上)』 山喜房仏書林。
- Bühnemann, Gudrun. 1980. *Der allwissende Buddha*. Vienna: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, Universität Wien.
- Franco, Eli. 2011. "Perception of Yogis—Some Epistemological and Metaphysical Considerations." In: *Religion and Logic in Buddhist Philosophical Analysis*, ed. Helmut Krasser et al., 81–98. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- 岩田孝 1986 「Prajñākaragupta によるヨーガ行者の知の無錯乱性証明の一視点」『印仏研』35(1): 142–145.
- 岩田孝 1987 「ヨーガ行者の知の整合性について——法称説を中心にして——」『比較思想の世界』北樹出版, 179–206.
- 川崎信定 1992 『一切智思想の研究』春秋社。
- Moriyama, Shinya. 2014. *Omniscience and Religious Authority*. Berlin: LIT Verlag.
- 櫻部健 1969 『俱舍論の研究』法蔵館。
- 志賀淨邦 2016 「Tattvasaṃgraha および Tattvasaṃgrahapañjikā 第21章「三時の考察 (Traikālyaparīkṣā)」校訂テキストと和訳 (kk. 1809–1855)」『インド学チベット学研究』20: 76–130.

〈キーワード〉 ヨーガ行者の直観, プラジュニャーカラグプタ, ジュニャーナシュリーミトラ

(信州大学准教授, Dr. Phil.)